

書物を媒介とした知のネットワークへ

「吉岡家蔵書目録」と吉岡敦直蔵書印

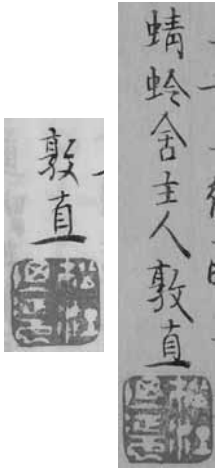


図3 同右（奥書）



図2 「慕景集 附作者考」、「潮来考」（表紙）

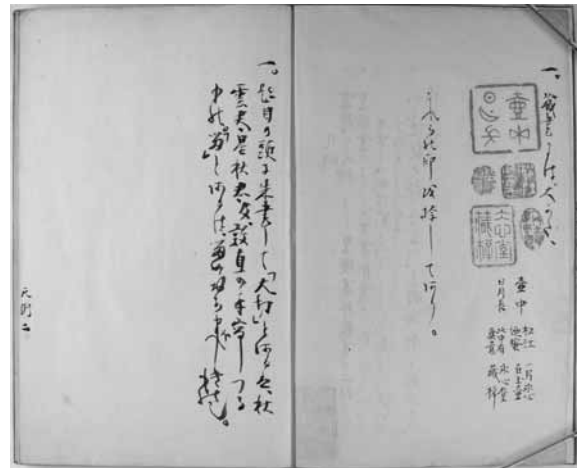


図1 「吉岡家蔵書目録」（凡例）

国文学研究資料館では、昭和四十七年（一九七二）の創設以来、日本文学とその関連資料の調査収集事業を継続し、それらを利用した共同研究を推進する研究事業を行ってきました。近年では、人文科学の諸分野で注目され新たな学問の潮流となっているデジタル・ヒューマニティーズに寄与すべく、多彩な学術データベースの構築にも取り組んでいます。資料をデジタル化し公開することで重要なことは、五十年、百年後の利用に堪える高精細・高品質な画像を提供することだけではありません。デジタル情報としてどのようなメタデータを付与するか、すなわち、対象となる資料をいかに分析・分類しテキスト情報として蓄積していくかが、学術資料の新たな価値の発見そして研究領域の横断と拡充にも、深く関わってきます。

図1は、「吉岡家蔵書目録」の巻頭凡例です。当該蔵書目録の作成者が、自家の蔵書印五類「壺中日月長」「松江廻蟹」「此中有真意」「一片水心在玉壺」「水心堂蔵梓」を例示（当館OPACに書誌注記あり）した後、次のように記しています。

一、題目の頭に朱書して「大切」とあるは、秋雲君・星秋君・及、敦直の手写しつるもの。「留」とあるは、留めおかまほしきもの也。

秋雲・星秋は、吉岡敦直（一八六八～一九一一、千葉中学校教諭）の祖父と父であることが、敦直遺稿集の『蜻蛉舎集抄』から確認でき（国立国会図書館「デジタル化資料送信サービス」による）、本書は、吉岡家三代の典籍類を後世に伝えるべく、敦直が蔵書整理を行った記録とわかります。さらに、国文学研究資料館で作成公開している「蔵書印データベース」によって上掲の蔵書印を検索すると、当館所蔵資料が多数ヒットします。その情報を手掛かりに、管理台帳をみていくと、図1の蔵書目録が当館に収蔵された経緯とは異なるものの、吉岡家旧蔵と思しき九十二点（二三一冊）の一括購入資料群があることが判明します。図2は、そのうちの二点です。ともに図1の蔵書目録で書名が確認でき、「大切」の朱書がある敦直手写本です。縹色表紙に墨書された筆跡も同一、また、図3に掲げた如く「松江廻蟹」の印が両書の巻末奥書に認められます。

以上、①～③のデジタル情報を繋ぎ合わせることで、誰から誰の手に資料が渡ったか、蒐書に何を求め何を重視し後世に遺そうとしたのか等、比較的容易に可視化することができるようになります。書物の集積と移動史を通覧することは、知的営為の連鎖を解明することに他ならず、そのために貴重な情報源となるのがメタデータです。資料にまつわる情報の一つ一つは、それ単独では一つの「点」に過ぎません。しかし、精度の高いメタデータを蓄積し発信し続けていくことで、誰かの知見が情報と情報の関連を見出し、「点」と「点」が結び付き幾筋もの「線」となり、情報の網状から未だ見ぬ意味が立ち上がってくる、新たな学問の地平も、そこから拓けていくものと考えます。

（青田寿美）